

台湾原住民語「邵語（サオ語）」——消滅の危機言語——

新居田 純野

世界における消滅の危機言語

現在、世界ではおよそ六千語前後の言語があるとされているが、そのうち約二千語は消滅の危機に直面している。

ただ、一口に消滅の危機言語といっても、その危険度にはいくつかの段階がある。国連教育科学文化機関（ユネスコ、本部パリ 二〇〇九年⁽¹⁾）によると、すでに消滅してしまった言語は二二八語、消滅の危険度の最も高い「極めて深刻な言語」は五三八語、「重大な危険にある言語」は五〇二語、「危険な言語」は六三三語、「脆弱な言語」は六〇七語となっている。そして、非常に厳しい状況にある言語の二〇パーセントから五〇パーセントが今世紀にはなくなると考えられている。

言語の消滅が意味すること

言語はコミュニケーションのツールであり、人間として生きていくための根本的な思考や哲学といったものを構成するものである。同時にその言語を話す人々の知的な営みの結晶であり、自らのアイデンティティの証であるといえるだろう。

このような言語が消えていくことがどのようなことを意味するのだろうか。言語にはその言語を話す人々の文化や価値観などが刻印されている。つまり、言語が消えることによつてそのような文化が人類から失われていくということの意味し、言語が消滅してしまえば、長い年月をかけて育まれたかけがえない文化や文化的意義を取り戻すことは二度とできないのである。

その点からも、言語を守ることは非常に重要なことと考えられる。そこで、このような消滅の危機に瀕している言語を守るためには、第一にその言語の音韻や文法、語彙などを調査収集して分析し、その言語体系の概要をまとめることである。そして、その言語を話す人々の文化や思想、生活の記録を残すためにテキストを収集し、たとえば話者がいなくなったとしてもその言語の音声を残すために機器媒体によつて生データを収集する作業も必要になる。

さらに、こういった作業をもとにその言語を守ろうとする母語話者のために教材を作ったり、その言語教育に関わっていくことも必要になるだろう。

台湾原住民とその言語

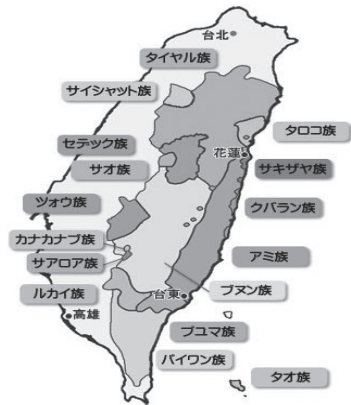
台湾には原住民が十六部族いるとされている。二〇〇〇年までは九部族といわれていたが二〇〇一年十月にはサオ族が第十番目の台湾原住民として認定された。その後、続けて六部族が認定されて現在では十六部族になっている。

現在、台湾の人口は五五万人ほどであるが、原住民の人口⁽³⁾は全人口の約二パーセントである。台湾原住民の中で最も知名度の高いアミ族は二十万人を超えているが、その言語アミ語でさえも脆弱な状況にある。例えばサキザヤ族の人口は九七四人、サアロア族は四一二人、カナカナブ族は三五七人と千人にも満たない部族がある。実は、調査を開始した二〇〇二年には、サオ族の人口はわずか三百人台であったが、現在八一人になっている。このように原住民の人口が増えてきているのは、台湾政府の原住民を保護していききたいという考えのもとに、原住民の認定の基準⁽⁴⁾が変わってきたからである。

台湾原住民言語の現状

次の表は台湾原住民語を消滅の危険度のレベルに分けたものである。

話者が少なく消滅の方向をたどるであろうといわれている言語である、カナカナブ語、クバラン語、サキザヤ



台湾原住民分布地区

語、サアロア語、サオ語は現在非常に厳しい状況になっている。

台湾原住民語には文字がなく、その部族間だけで使われてきたため、その言語を残すためには日常的に話せる母語話者が継続的にいなければならない。しかし、既に人口も減っており、公用語が中国語となった今、その母語を話せる人はそれぞれの原住民の中でも高齢者のみとなり、またその高齢者も次第に亡くなっていき母語話者は激減しているのが現状である。

消滅の危険度別台湾原住民語

危険度	台湾原住民語
脆弱	アミ語、パイワン語、ピユマ語、ルカイ語、セデック語、タイヤル語、ツオウ語、タオ語
危険	ブヌン語
重大な危険	サイシャット語
極めて深刻	カナカナブ語、クバラン語、サキザヤ語、サアロア語、サオ語

台湾原住民サオ族とその言語サオ語

サオ族⁽⁵⁾は台湾中部の日月潭近くに居住している。日月潭というのは台湾のほぼ中央にある非常に美しい湖で、

その中ほどに小さな島が一つある。その島はサオ族に「ラルー」と呼ばれていて、サオ族の祖先が宿る場所、聖地とされている。

サオ語はオーストロネシア語族に属していて、子音が二十一個、母音が三個あるが、原住民語の中でも非常に発音が難しいといわれているため、母語話者の音声を残すことはとても重要であると考えられる。

二〇〇二年の調査時には語彙調査の協力者は次の表のように八人いたが、文法調査に対応してくれる人はキラシ氏、タルマ氏のわずか二人のみであった。

二〇〇二年調査時のサオ語母語話者のインフォーマント

現在	没	没	没	没	没	八二歳	没	没
生年	一九二三	一九二七	一九四〇	一九二五	一九二五	一九三七	一九三七	一九三八
邵語話者	キラシ	イスツ	タルマ	プニ	A	B	C	D

現在、サオ語を話せる人は高齢者ではB（八二歳）以外に二名（八〇歳、八四歳）が、若い世代では三名いるが、日常的に使っているわけではないため、若い世代の二名は当時まだ元気であったキラシ氏に指導を受けながらサオ語の教師資格を取り、小学校で教えるようになったようである。

サオ語を守るために政府の政策のもとで始まった小学校の授業であるが、授業は一週間に一時間くらいしかなく、簡単な語彙や文章を習うもので日常会話ができるようなレベルまでいくのはなかなか難しいのが現状である。

サオ族の人々と祭事

次の写真はサオ族の女性たちである。かつてはサオ族の衣装は自分たちで織っていた。祖霊祭などの祭事時には、衣装と合わせて頭に自然の花や草などをつけて華やかに着飾っていた。



着飾ったサオ族の女性たち



祭事における女性の衣装

シエンシエンマという女性の巫女はサオ族において重要な役割を担っていて、祖霊祭などの祭事には欠かせない存在である。シエンシエンマはもともとは祖先の声を聴いてみんなに伝えたり、また病気になる人にはその病気に効果のある薬草を処方するような医者役割もしていたそうである。

シエンシエンマには誰でもなれるわけではなく、サオ語の話せる、行いのよい人が推薦され、祖先から許可をもらって初めてシエンシエンマになることができる。シエンシエンマとして承認されるためには、日月潭のラルー島まで船に乗って渡り、そこで言い伝えにある昔のシエンシエンマに、シエンシエンマになることを許可しても

らうための儀式を行う。

言い伝えでは、昔の一番偉いシエンシエンマは耳がよく聞こえなかったので、「儀式のために来た」ということを知らせるため、島に上陸する時にはみんなは咳をしながら上陸し、島に上陸したら布を頭からかけて、その偉いシエンシエンマに新しいシエンシエンマとして認めてもらえるかどうか伺いをたてるのである。

この写真の儀式は二〇〇三年に執り行われたものであるが、また島は原型を残していて、サオ族の象徴である木も残っていたのでいろいろな行事を執り行うことができた。しかし、いまではこの大きな木も倒れてしまっている。



ラルー島へ向かうシエンシエンマたち



ラルー島におけるシエンシエンマ就任の儀式

サオ族には祖霊祭という大事な行事があるが、これはいわゆるサオ族の正月で、旧暦七月の最後の晩から始まる。祖霊祭は一カ月ほど続いて、その期間中は祖先をお迎えして、踊ったり歌ったりお祈りしたりお酒を飲んだ

りして過ごすのである。次の写真はシエンシエンマたちがサオ族の歌を歌いながら祖霊祭における儀式をしているものである。



祖霊祭で儀式を執り行うシエンシエンマたち



祖霊祭で並べられた祖霊かご

かごが一行に並べてあるが、これもサオ族にとつては大事なもので、サオ語では「u-ta-ta-lu-an」という「祖霊かご」である。このかごの中に祖先の服やアクセサリーを入れて祖先が帰ってくるのを迎えする。

また、播種祭という春に行うお祭りもあり、広場にブランコを作って、そのブランコに順番に乗って長老に願い事をしたり、結婚の報告をしたりする。このブランコがサオ族にとってはとても大切なもので、ブランコが大きく揺れるさまは稲が実って重い穂が垂れて風に揺れている様子を表わし、豊作を意味するのである。



播種祭



播種祭のプランコ



杵歌の演奏

サオ族には他の部族にはない特徴的な杵歌⁽¹⁾というものがある。サオ族の女性たちが石臼を杵で打って音楽を奏で、杵の音に合わせて、竹筒でもリズムを取ってみんなで歌うのである。

サオ語辞書及び文法書の出版

東京大学の元教授で台湾原住民語の大家である土田滋先生は一九八七年にプニ氏にインフォーマントとなつてもらい、サオ語の語彙や文例をそれぞれ三千例近く集められた。

二〇一八年に出版した『台湾原住民瀕危語言 邵語—Endangered Language THAO—』の辞書部分は、土田

先生が収集された語彙と文例を使って、キラシ氏に一つ一つ確認しながら発話してもらい、それを音声化してまとめたものである。



イスツ氏、キラシ氏

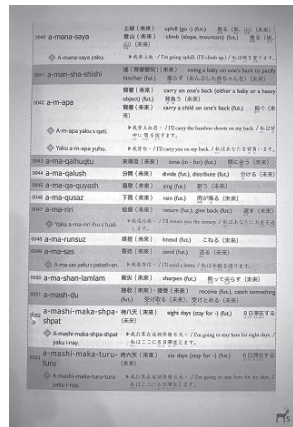


ブニ氏

サオ語の調査に対応してもらえるインフォーマントがほとんどいないため、どの研究者もほぼキラシ氏一人に調査してまとめているのであるが、本書は、プニ氏に聞き取りした語彙や文例をキラシ氏に確認して音声を録音したもので、三十年という年月を経た異なったサオ語話者の記録であるため普遍的なサオ語であり、そのことが非常に貴重な資料となっているといえるだろう。



台灣原住民瀕危語言「邵語」



サオ語辞書 (「邵語」)

本書の辞書部分にはキラシ氏の音声で語彙と文例ごとにのせられていて、電子ペンを使ってその音声を聞きながら学習できるようにになっているが、ここでは、文字を持たない言語をどのように発話してもらって録画・録音したかについて紹介する。

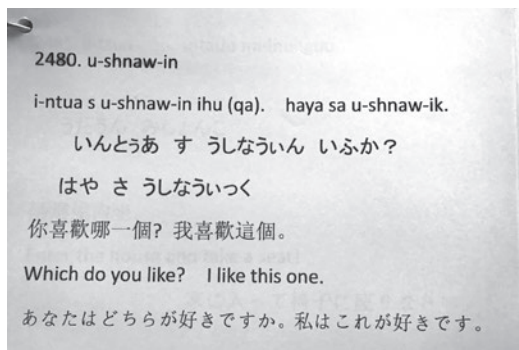
キラシ氏が読めて、書けるのは日本語のカタカナとひらがなだけで表記したカードを作った。そこで、発話を録音する時、次のような語彙と文例のそれぞれ一つずつにひらがなで表記したカードを作った。

キラシ氏にこの紙を見ながら調査者の発音を聞いてもらい、確かに正しい単語や文例だと確認できたら発話してもらい、それを録画・録音した。ただ、当時キラシ氏は九〇歳を過ぎていたため、台北のスタジオまで移動することは身体的に難しいということで、日月潭の民宿の部屋を借りての録画・録音となった。そこで、ベッドのマットレスで周りを囲って雑音を遮断し音声を録音した。

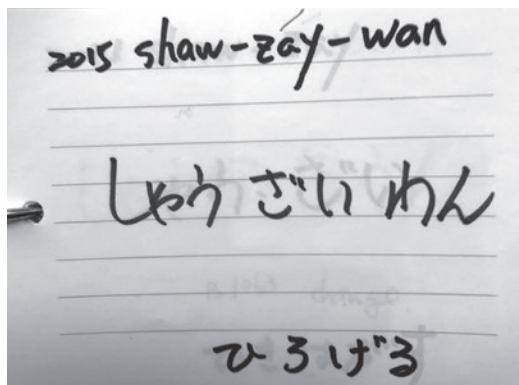
キラシ氏は高齢者であったにも関わらず、一日六時間以上の録画・録音に対応してくれた。どの語彙もどの文

例も一つずつ合っているか確認しながら、問題があれば納得するまで議論を重ねたため、長時間の録画・録音となり、すべての語彙と文例を終わらせるのに全部で二週間以上の時間を要した。

また、二〇〇六年にはキラシ氏とタルマ氏の対談を録画・録音することができたが、残念ながらその文字化はまだ完成していない。対談ではサオ族の子供たちの遊びや昔の生活、また祖霊祭やシェンシエンマのことなど様々な内容をサオ語で話し合っているもので、サオ語話者同士の対話ということで非常に貴重な資料であり、いずれは文字化して公開をしていきたいと考えている。



録画・録音時に使用した文例カード



録画・録音時に使用した語彙カード

サオ語の特徴

サオ語の言語表現全体を通してあげられるサオ語独自の特徴としては、文字を持たないことにも関係していると考えられるが、「今、ここで」という、現場性を重視した上で発話が行われることである。たとえば、「彼は畑に行く」という内容をサオ語で発話してもらおうとすると、被調査者は「誰が行くのか」「今、その人は目の前を歩いているのか」「何をしに畑に行くのか」などといった具体的な情報を確認しないとなかなか発話につながらない。そこで、被調査者の知っている具体的な人物の名前（人称代名詞を使うことはあまり好まれない）をあげ、「畑に行つて耕すために Abish（アビッシュ）は今あなたの目の前を歩いて畑に向かってる」というように具体的な状況を示すと、ようやく発話されるのである。

(1) Thumi Abish mu-buhat.⁽⁸⁾

今 アビッシュ MV-畑

今、アビッシュは畑に行く。

このようにそのできごととは抽象的なことではなく、話者間に共通な認識があることでなければならない。



タルマ氏とキラシ氏の対談の様子

次に、「存在・所有表現」、「指示表現」について用例を示しながらサオ語における特徴を述べてみたい。

存在・所有表現

用例 (2) (3) (4) は存在、用例 (5) (6) (7) は所有となるが、サオ語では「存在」も「所有」も所有動詞 *yanan* (持っている) によって表わされる。

(存在)

(2) *Zintun yanan rusaw.*

日月潭 *yanan* 魚

日月潭に魚がいる。

(3) *Hudun yanan wazish.*

山 *yanan* 猪

山に猪がいる。

(4) *Palanan yanan Ihuzush.*

かじ *yanan* 十かお

かじにすみがある。

(所有)

(5) Huya wa thaw yanan ma-ra'im a taun.

その Lig 人 yanan Sta-大きな Lig 家

その人は大きな家を持っている。

(6) Yaku yanan Lipún a patash-an.

IsN yanan 日本 Lig 読む-LF

私は日本の本を持っている。

(7) Yaku yanan sa azazak.

IsN yanan sa (小辞) 子供

私は子供がいる。

このようにサオ語ではどのような存在物であっても、存在場所がその存在物を所有することで存在につながるという捉え方になる。

つまり、サオ族の世界においては、魚や獣などの生き物はそれぞれが自らの意志で存在するのではなく、自然という大きなわくぐみが魚や獣などの生き物を所有することで魚や獣などの生き物は存在するととらえていると考えられる。

指示表現

サオ語では、場所をさし示す指示詞は基本的には「ここ」が *i-nay*、「そこ」が *i-say*、「あそこ」が *i-suy*、かなり遠くにある場所であれば *i-usi* とそれぞれの指し示す範囲を分担して受け持っている。これらの使い分けは、遠近の違いに加えてさらにその指示物が見えるか見えないかも重要な情報となる。

たとえば、「あなたの家はどこですか」という質問に対し、被調査者はその家が近くにあるのか遠くにあるのか、見えるのか見えないのかなどを確認してからの発話となる。

(8) Nak a taun i-nay.

1SG Lig 家 Loc-ここ

私の家はここだ。(今日の前にある家をさして)

(9) Nak a taun i-say.

1SG Lig 家 Loc-そこ

私の家はそこだ。(家は離れているが見える)

(10) Nak a taun i-suy.

1SG Lig 家 Loc-あそこ

私の家はあそこだ。(家は離れていて見えない)

(11) Nak a taun i-tusi Taipak.

1SG Lig 家 Loc-あそこ 台北

私の家は遠い台北にある。

また次の (12) (13) の用例は「子供が今ここに話者と一緒にいるかどうか」によって使い分けられている。

(12) M-i^{hu} a azazak i-suy nak a taun.

2sG Lig 子供 Loc-あそび 2sG Lig 家

あなたの子供は私の家にいる。(話し手も聞き手も子供が見えない)

(13) M-i^{hu} a azazak i-nay nak a taun.

2sG Lig 子供 Loc-いま 2sG Lig 家

あなたの子供は私の家にいる。(話し手は子供を見ながら)

(12) (13) はどちらも、聞き手の子供が話し手の家にいることを話し手が聞き手に知らせている。しかし、(12) の場合は、話し手が外に出かけたところで聞き手と会い、聞き手の子供が話し手の家にいることを告げている。これは両者とも外にいて、聞き手の子供の姿はみえない。(13) の場合は、話し手は家において、たとえば聞き手から電話がかかってきた場合の答えである。つまり、話し手は聞き手の子供とともに話し手の家の中にいるのである。

サオ語では「今、ここで」、つまり現場性にこだわって発話され、また、対象物を実際に見て知覚して発話すると同時に、できごとを知覚し実際の経験として話者に取り込まれた上で発話が行われるという特徴があるといえるだろう。

参考文献

(中国語文献)

簡史朗・石阿松 編著 (2001) 『邵語読本』 台湾：行政院文化建設委員会

(日本語文献)

安部清哉・新居田純野 (2007) 『石阿松氏「サオ語語彙 4000」—仮名が記録した太平洋の「危機言語」—』 学習院大学東洋文化研究所調査研究報告53

安部清哉・長嶋善郎・新居田純野 (編)、土田滋 (監修) (2008) 『サオ語 (台湾・邵語) 語彙 (英語・日本語索引付)

—サオ語研究資料Ⅱ—』 学習院大学東洋文化研究所調査研究報告54

新居田純野 (2005) 「存在動詞における「遠／近」「可視／不可視」—オーストロネシア語(サオ語)の場合—」『国文学解釈と鑑賞』1: 164—173. 東京: 至文堂.

新居田純野 (2008) 「サオ語 (台湾) における現場指示表現—日本語との対照から—」 学習院大学『人文』6: 213—231.

新居田純野 (2015) 「サオ語とブヌン語カ社群方言の存在・所有表現—日本語の存在・所有表現との対照から—」

『台湾原住民研究』19号 風響社: 75—102

新居田純野 (2018) 「言語表現からみたサオ族のものやことのとらえ方について—サオ族長老のサオ語調査を通

じ—」『Language and Linguistics in Oceania, vol.10』 Japanese Association for Oceanic Languages: 21-32

新居田純野 (2018) 『台湾原住民瀕危語言 邵語 -Endangered Language THAO-』 台湾大新書局

(英語文獻)

- Blust, Robert (2003) *Thao Dictionary*. Institute of Linguistics, Academia Sinica, Language and Linguistics Monograph Series No.A5. Taipei:Academia Sinica.
- Li, Paul Jen-Kuei (李壬癸) (2011) *Thao Texts and Songs*. Taiwan: Institute of Linguistics, Academia Sinica, Taiwan.

注

- (1) <http://www.unesco.org/new/en/culture/themes/endangered-languages/atlas-of-languages-in-danger/>
- (2) 台湾原住民簡介
<http://www.apc.gov.tw/portal/docDetail.html?CID=365D6C3107861B05&DID=0C3331F0EBD318C2AFAC3B7E9AA12AF6>
- (3) 原住民族人口統計
<https://www.apc.gov.tw/portal/docList.html?CID=AC58C79198E1FD34>
- (4) 原住民族身分法解釋彙編一〇四年十二月版(原住民族委員會)
- (5) サオ族の紹介 <http://www.apc.gov.tw/portal/docList.html?CID=0E4C97873EBE5221>
- (6) ㄆ: /p, b, m, f, t, d, n, th[θ], s, z[ʒ], lh[ʎ], ㄌ, ㄌ, r, sh[ʃ], k, ng[ŋ] ㄌ, q, h, y, w, - [glottal stop] / ' ㄇ: /a, u, i/
- (7) 杵歌 <https://www.youtube.com/watch?v=MNDPb4-Pdmc>
- (8) 文法的な注釈は次のように略号を示す。
1s:First person singular 2s:Second person singular
N:nominative G:genitive
MV:Movement prefix L:F:Locative-focus
Lig:lignature Loc:locative St:stative